

鉱物資源枯渇型都市の観光資源型都市への転換に関する諸課題

—理論的フレームワークの構築と中国雲南省个旧市の事例考察—

On the subjects for transformation to tourism resources cities from mining resources-exhausted cities: The construction of theoretical framework and the case study of Gejiu city on Ynnnan province in China

伊藤 昭男*

ITO, Akio

本稿の目的は、鉱物資源枯渇型都市から観光資源型都市へと産業転換する際の諸課題を考察するための普遍的な理論的フレームワークを構築すること、またそれを用いて世界的な錫鉱を有する中国雲南省个旧(GeJiu)市を事例考察することである。理論的フレームワークの基礎は、都市経済転換の理論的エッセンスを示したジェイコブズ(2012)を活用した。理論的フレームワーク構築のねらいは、今後、北海道など多様な都市の検証を通じて一般理論化を図ることにある。

キーワード：鉱物資源枯渇型都市、産業転換、个旧市

1. はじめに

北海道では空知地方の5市1町(芦別、歌志内、夕張、赤平、三笠、上砂川)をはじめとしてかつては多くの石炭資源型鉱山都市が存在したが^{注1)}、資源枯渇に伴う鉱山事故の多発、経費の膨張、さらには国の石炭・エネルギー政策の転換により、鉱物資源型都市からの脱却を余儀なくされた。これら諸都市は観光をはじめとする新産業の創造に努力を続けているが、産業転換に成功していないばかりか、人口減少がとまらないことに象徴されるように地域再生そのものへのいきづまりがみられる。^{注2)} こうした状況は日本より経済発展の時期が相対的に遅れた中国においても同様にみられる。中国では2001年から資源枯渇型都市の転換問題に着手がなされ、国務院は2008年に転換を試験的に行う69の都市を選定した。本稿の目的は、鉱物資源枯渇型都市から観光資源型都市への産業転換に際しての諸課題を考察するための理論的フレームワークを構築すること、およびそれを中国の事例に適用して観光資源型都市への産業転換に関する政策的インプリケーションを見出すことにある。考察事例は現在、産業転換が求められている典型的な錫鉱物資源枯渇型市である中国雲南省个旧(GeJiu)市^{注3)}を選定した。なお、筆者はかつて伊藤(2014)において石炭資源枯渇型都市の観光資源型都市への転換可能性について中国河南省焦作市、夕張市、田川市、いわき市を転換戦略の可能性モデルを用いて比較考察した。本稿で取り上げた个旧市は鉱物資源の中心が錫であること、志向している産業転換の方向性が必ずしも観光産業のみではないという相違はあるものの、世界的な錫鉱山都市としての隆盛から観光資源型都市へと転換を意図している事例は、北海道における鉱物資源枯渇型都市が観光資源型都市へと産業転換を図る際の諸課題と政策インプリケーションの導出に多くの示唆を提供すると考え、事例として選定した。

*北海商科大学

先の研究(伊藤 2014)とあわせて北海道における鉱物資源枯渇型都市が観光資源型都市への産業転換を考察する一連の研究として位置づけるものである。

2. 先行研究についての検討

个旧市の産業転換に関する先行研究を分類・整理したのが表1である。

表1 个旧市における産業転換の考察に係る先行研究文献の分類・整理

番号	分類内容	文献名
1	个旧市の観光資源の抽出・類型化から観光資源の特徴、空間的組み合わせについて考察した研究	馬(2007)
2	観光産業を个旧市の産業転換の支柱と考える研究	陳・宋(2011)、張・胡(2011)
3	鉱業、工業、農業、生物資源、サービス業など多様な産業により个旧市の産業転換を考察する研究	王(2011)、何(2011)、 陳・宋・王・洪・范(2011)、李(2013)、 中共个旧市委員会・个旧市人民政府(2013)
4	民族観光(エスニック・ツーリズム)に重きをおき个旧市の産業転換を考察する研究	李・胡(2013)

分類番号1は、个旧市の観光資源の抽出・類型化から観光資源の特徴、空間的組み合わせについて考察した研究である。馬(2007)ではこれらの考察を通じて当市が有している工業資源および生態資源を活かした観光資源型都市へと段階的に転換することを提案している。分類番号2は、観光産業を个旧市の産業転換の支柱と考える研究である。陳・宋(2011)では、観光資源分析、問題分析、事業化分析から、个旧市の観光開発はまだ初期的な段階にあるとして、8つの対策案(ポジショニング、観光資源の総合利用、交通条件の改善、観光業による現代サービス業の促進、紅河地域の観光産業の緊密連携、観光資源保護を重視した開発、資金投入の増加、観光宣伝の強化)を今後検討すべきとしている。また張・胡(2011)は、鉱物資源型都市である个旧市は持続可能な低炭素経済発展の道を志向する都市として無煙型産業であり、多くの就業機会を創造する可能性、産業構造の多元化を促す可能性、都市化による生活環境の改善を促す可能性などの観点も含め観光産業を発展させることには意義があるとし、さらに当該都市には国家による支援、悠久の歴史文化、豊富な鉱業遺産、良好な居住環境、優位な交通条件があることから、観光資源開発(とりわけ工業遺産観光)を突破口とした観光資源型都市を目指すべきであると主張している。分類番号3は、鉱業、工業、農業、生物資源、サービス業など多様な産業により个旧市の産業転換を考察する研究である。王(2011)では、当該都市の新たな産業発展として、鉱業においては新鉱区の開発および新たな鉱物資源(霞石など)の開発や技術的イノベーションを推進すること、植物性薬品、紡績産業を含めた現代的な農業を推進すること、小売業および観光・リゾート産業などサービス業を推進することを主張し、さらに都市と農村との一体的発展や社会保障の充実に力を入れることによって持続可能な都市への転換を図るべきとしている。何(2011)は、錫をはじめとした鉛、アルミニウムなどの金属加工の高度化と生物資源開発を二大産業展開とし、さらに無公害

野菜、優良な果物、乳業など現代的な農業の展開が戦略的に重要としている。また都市と農村の一体化による経済発展もあわせて重要な戦略であるとしている。陳・宋・王・洪・范(2011)は、当該都市の産業生産の比重が鉱業に偏っており、鉱業以外の産業の基礎が弱く、諸産業の連関度が低いという認識から、既に錫資源が枯渇していることを考慮すると伝統鉱業技術の高度化や霞石への資源転換(酸化アルミニウム、炭酸カリウム、セメントとの連動)、冶金・化学工業・建材・石炭・電力、農業など多様な産業への転換、加えて木綿産業・薬剤としてのトリカブト産業・生物資源産業(茶ポリフェノール、タピオカ麦芽糖など)・観光(錫文化観光、リゾート観光、グリーンツーリズムなど)および現代的サービス産業の発展による当該都市の産業転換が必要であるとともに、その転換には多くの困難が伴うと主張している。李(2013)は当該都市の産業転換をSWOT分析を行った上で、錫産業の合理化、新材料・生物薬品・乳製品・科学的農業などによる多元的産業複合モデルとしての転換を主張している。中共个旧市委員会・个旧市人民政府(2013)は、当該都市の経済、政治、社会、文化、生態の五位一体による総合的な転換方向を示したものであり、その中で産業転換に関しては、金属加工産業の高度化、生物資源産業(茶ポリフェノール、木綿、精米加工など)、建築及び新材料産業、新エネルギー産業、観光及び現代的サービス業、農業といった多元的な産業転換の必要性を説いている。分類番号4は、民族観光(エスニック・ツーリズム)に重きをおいて个旧市の産業転換を考える研究である。李・胡(2013)は、民族観光は当該都市の産業転換において重要な役割を果たし得るとして、民族観光資源と錫文化を結合させた差別化競争戦略の実践を主張している。具体的には合田民俗村など民族観光資源による観光開発の一層の展開を図ると共に、个旧市の鶏街鎮を中心とした北側観光コースと个旧市東南方向の老廠鎮を中心とした南側観光コースを提案している。

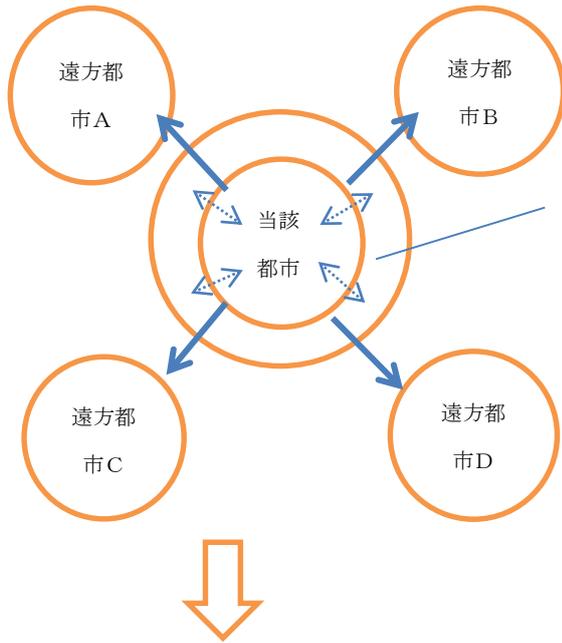
3. 理論的フレームワークの構築

3.1 理論的フレームワーク構築の考え方

鉱物資源枯渇型都市がどのようにして持続可能な都市に転換すべきかについての確立した理論は今のところ存在しない。鉱物資源枯渇型都市がどのようにして観光資源型都市へと転換すべきかの理論も同様であるが、その転換戦略の可能性モデルを提示した研究として雛・何(2012)がある。本稿ではこのような状況を踏まえ、ジェイン・ジェイコブズによって主張された自律的な都市経済の考え方(ジェイコブズ 2012)に鉱物資源枯渇型都市がどのようにして持続可能な都市に転換すべきかの理論的エッセンスが含まれているとの認識から、それらの理論的エッセンスを用いて理論的フレームワークを構築し、それを鉱物資源枯渇型都市が観光資源型都市へと産業転換する際の諸課題を明らかにするための理論的フレームワークと位置づけ、个旧市を事例に考察する。

3.2 理論的フレームワーク

ジェイン・ジェイコブズによる自律的な都市経済の考え方(ジェイコブズ 2012)から理論的エッセンスを抽出の上、本稿の考察に適合した理論的フレームワークとして構築したものが図2および図3である。ここで図2および図3の上図は他律的な都市経済の空間経済関係を示したものであり、同じく下図はその体質構造を2つの基本要因と6つの関連要因として示したものである。これらの図は、ジェイコブズの言う供給都市の理論的エッセンスを筆者なりに解釈し、要因



遠方都市への資源供給基地として都市経済循環が固定化され易い

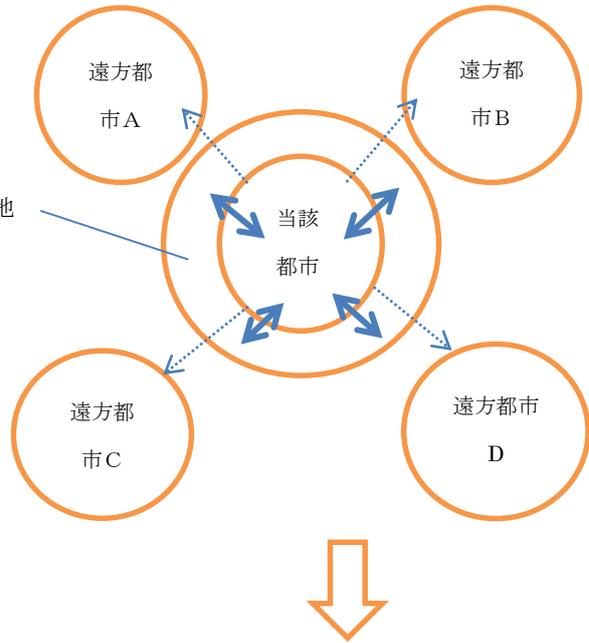


輸入(移入)置換を発生させづらい



- 遠方都市の生産ニーズが主で住民および生産者の生産ニーズに応えづらい
- 都市圏内の経済紐帯が弱く、遠方都市とのリンケージが弱くなると都市経済は急速に不安定になり易い
- 修正力、自己調整力に欠けがち (ホメオスタシス・フィードバックが効きづらい)
- 補助金依存体質になり易い
- インプロビゼーションを生じさせづらい
- 産業の多様化・多元化が進みづらい (単一業種構造になりがち)

図2 他律的な都市経済の空間経済関係と体質構造
(資源供給型：低い持続可能性)



都市内部と後背地との経済紐帯が強く、都市圏内経済循環を形成し易い



輸入(移入)置換を進め易い



- 都市圏住民および生産者の生産ニーズに応え易い
- 都市圏外部とのリンケージが弱くなっても都市経済は急速に不安定とはなりづらい
- 修正力、自己調整力を高め易い (ホメオスタシス・フィードバックが効き易い)
- 補助金依存体質になりづらい
- インプロビゼーションを生じさせ易い
- 産業の多様化・多元化が進み易い (複合業種構造を形成し易い)

図3 自律的な都市経済の空間経済関係と体質構造
(資源循環型：高い持続可能性)

抽出および図式化したものである。図2にみるように鉱物資源依存型都市は、遠方諸都市の資源経済の変化に順応しづらい体質であることを意味し、補助金への依存や単一的な業種構造といった他律的な体質を固定化し易い構造であることを示している。一方、図3は持続可能性の高い都市経済を示したものであり、遠方都市との経済関係は有するものの、当該都市は住民および生産者の生産ニーズに対応した輸入(移入)置換による産業を展開させており、資源の枯渇が生じた場合でも急速に都市経済が不安定となることがない自律的な都市経済を示している。このことは当該都市が修正力・自己調整力を有し、ホメオスタシス・フィードバックの効く、またインプロビゼーション(臨機応変力)も生じ易い、経済変化に順応的な体質となっていることを意味し、補助金に依存せず、複合的な業種構造といった自律的な体質を固定化し易い構造であることを示している。

本稿においてはジョイコブズの理論的エッセンスから導いた上記の理論的フレームワークをコア・フレームワークとし、さらに持続可能性の高い都市から観光資源型都市への絞り込みを行うために、関係するいくつかの諸見解を加えて全体的な理論的フレームワーク体系を構築する。その理論的フレームワーク体系を示したのが図4である。

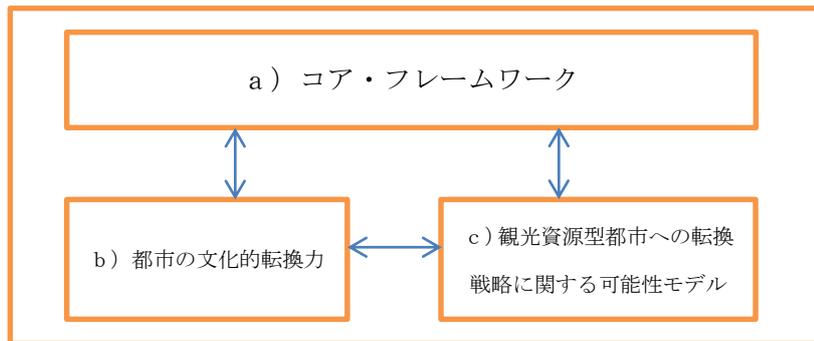


図4 鉱物資源枯渇型都市の観光資源型都市への転換を考察するための理論的フレームワーク体系

ここでa)は上記図2および図3で示したジョイコブズの理論的エッセンスに基づくコア・フレームである。b)はa)に加えて、都市が観光資源型都市へと産業転換するには当該都市が培ってきた文化や生活の営みに立脚した文化的想像力を重視して実践すべきであるという追加的関連フレームである。吉見(2008)は都市は複数の文化がせめぎ合う場であり、そこに農村の文化や宮廷の文化とは違う異質性を見出している。このことは、都市には様々な文化を有する住民および労働者が居て、彼らの有する文化に基づく行動の集合が都市の持続可能性を左右する力となることを意味している。吉見はまた、文化論的視座から衰退した地方の鉱山都市を「周縁化されることによる都市の死」として、そのような事態に直面した都市の対応に関して次のように言及している(吉見 2008、111頁)。

「しばしば採られてきた常套手段は「工業」から「観光」への軸足の移動である。炭鉱やコンビナートの一部をテーマパークに転換し、あるいはさまざまな「リゾート」として容貌をその地域にもたせる戦略が、いくつもの都市で練られてきた。しかしながら、そこにジレンマがある。もしもこうしたテーマパークなりリゾート化なりを成功させようとするならば、それまでの都市は培ってきた文化や生活の営みとはまったく異なる、異国風のイメージや風景で地域を覆いつくさなければならない。おのれの体が不治の病に罹っていることを悟った人間は、

死を逃れるためには体のすべてをすっかり人口化し、サイボーグになってしまわなければならないというわけだ。しかもこのような「改造」には、大規模な資本の導入が不可欠だから、成功の果実の多くは中央の大企業に吸い取られていく。・・・中略・・・そうした中で、もしも「再生」という戦略を構想するなら、その照準は、単に都市の経済基盤を整えることでも、人々の生活を擁護することだけでもなく、人々の文化的想像力を奪還すること、あるいはそのような想像力を育成することに向けられる必要がある。」

上記が示唆するところは、鉱物資源枯渇型都市が産業転換する（再生する）ためには、経済ばかりでなく都市の人々に照準をあわせた文化面の転換こそが重要であるということである。本稿では文化的想像力を文化的転換力に置き換え、関連フレームとして理論的フレームワークに加える。また、c) は雛・何 (2012) によって提示された観光資源型都市への転換戦略に関する可能性モデルを追加関連フレームとして理論的フレームワークに加えるものである。彼らは鉱物資源枯渇型都市の観光資源型都市への転換可能性を都市の発展条件に関する影響要因とポジションに関する影響要因から4つの転換可能モデルのパターンを考察しており、本稿の事例である个旧市に関する考察においても追加関連フレームとして有用であると考えられるため理論的フレームワークに加える。以上、3つの相互関連を含めたフレーム体系が本稿において構築した考察のための理論的フレームワークである。

4. 事例考察—転換に関する諸課題

4.1 考察対象都市の概要

个旧市は、中国雲南省紅河哈尼（ハニ）族彝（イ）族自治州の県級市である。その概況は、中共个旧市委員会・个旧市人民政府(2013)によると次のとおりである。「个旧市は1951年に市となり、管轄区の総面積は1,587 km²、管轄区は6鎮、2郷、1区である。都市建設区面積は12.5 km²、総人口は46万人である。世界でもまれな北回帰線上に位置する都市であり、年平均気温は16.4°Cである。世界で最も古くから開発された世界最大の錫生産基地であったが、1990年代から資源の枯渇が進み、2003年には国家発展改革委員会によって「雲南个旧老鉱業基地調整改造及可持續發展法案」が報告され、2008年には国務院によって全国における資源型都市転換の試験都市の一つに列せられた」。なお、市区の海拔は1,688mとなっている。个旧の錫生産の歴史は約2000年前に遡るとされるが、1990年代後半には資源枯渇の問題に直面し、2007年末には个旧鉱区の非鉄金属埋蔵量は50万トンにまで減少し、採鉱が容易な地表部および浅い地下部の資源は完全に枯渇した（陳・宋 2010、16頁）。2008年3月に个旧市は国務院によって国家の12資源型都市転換モデルの一つに列せられ、6,000万元の国家財政補助が支給されるとともに、45億元の中長期借款が个旧市と国家開發銀行雲南省分行とによって締結されたという（何 2011、61頁）。市内には伝統観光資源（老陽山、金湖公園および中心部建築群、宝華公園、水上遊樂園、農家樂觀光区、民族風景区、温泉觀光リゾート村、熱帯雨林風景区）、工業観光資源（錫の生産・加工企業として世界的に有名な雲南錫業集団が存在、錫工芸品、錫都博物館、各種工業遺跡）、都市環境資源、周辺観光資源（元陽の棚田、森林公園、古洞など）が存在する。北は開遠市、東は蒙白市があり、三都市群を構成している。

なお、陳・宋 (2011、68-69頁) は観光産業発展上の問題として、「観光資源開発の程度が低い」「観光資源が分散し、かつ交通が不便である（交通不便は長年、个旧市および紅河州の経済発展

における課題であり、観光産業の発展にも大きな支障)「基礎施設(交通、通信、電力、都市景観など)の水準が不十分」「観光における専門人材の欠乏」「観光開発資金の不足と生態環境を破壊しない開発が難しい」「観光産業の連携度を含め、紅河州の観光ビジネスの水準は低く、発展が緩慢」をあげている。

4.2 観光資源型都市への産業転換における諸課題

当該都市が観光資源型都市へと産業転換する場合の諸課題を先の理論的フレームワークの観点(先行研究の分類・整理も参考として)から考察するならば、以下の諸点を導くことが出来よう。第一は、基本的な課題は、過度の鉱物資源供給基地からの脱却を進め、他律的な都市経済循環構造の連鎖を弱めることである。経済学では天然資源の豊富さと経済発展は反比例関係にあるという仮説を“資源の呪い(paradox of plenty)”と称している。イノベーションの創造および産業クラスター形成も産業高度化へ向けた有力な選択肢ではあるが根源である資源の枯渇問題をクリアできる見込みが立たなければ不安定リスクは解除しえない。したがって資源を活かした関連加工品の自律的販売が可能な製品供給以外については鉱物資源関連業種への過度な依存は自律性および持続可能性の観点から高いリスクが伴うと考えるべきであろう。固有の鉱業遺産を観光資源とした産業転換は鉱物資源供給基地の脱却にはプラスの作用と考えられる。第二は、単一鉱物資源業種中心の都市経済から複業種展開による都市経済へと転換することが重要な課題である。そのためには都市圏域の住民および生産者ニーズに適合した輸入(移入)置換業種の育成・展開を考えることが重要である。それによって自律性および持続可能性が向上するからである。しかしそれには都市圏域の経済に関するポジショニング(観光を含めた)の再考が必要である。先の先行研究においては多様な産業展開が考察されているが、当該都市と後背地との連携による産業・業種の選定がなされなければ当該都市圏域の自律的生産には結びつかない。なお、産業転換の業種としては次のようなものが例として想定されよう(雇用の受け皿となる産業への転換、鉱業遺産を活用しうる産業への転換、当該都市の潜在資源を活用しうる産業への転換、持続可能性の高い産業への転換、外部需要に左右されづらい産業への転換、当該都市住民の生活向上に結び付く産業への転換など)。第三は、都市の総合的な文化水準の向上すなわち当該都市圏域の市民の文化水準の向上が重要である。広い意味での文化は教育や技術など人に体化されており、文化に体化された人々と当該圏域の社会・生態・経済・政治とが観光業を含めた新たな産業・業種創造と強ちに連携しあうのでなければ産業転換は成功しないであろう。そのためにも人々の意識転換を含めた人的育成が大きな課題となる。それゆえ、観光業を含めた複数の業種によって産業転換を図ることには意義があるが、あまりに多くの業種への転換を計画することには資金を含め焦点が定まらず効果が期待できないであろう。第四は、以上の実践の結果として、ホメオスタシス・フィードバックやインプロビゼーションの向上をめざすことである。そのためにも近視眼的にならず開放的な都市圏域として自立をめざしたクリエイティブ志向の人々の集積を進め、クリエイティブな都市圏域の創造にチャレンジしていくことが重要な課題であろう。与えられた鉱物資源依存中心の生き方ではなく、自ら資源を創り出す文化の定着こそが都市経済の好循環構造および自律的な都市経済圏域の形成を促す。

4.3 政策的インプリケーション

上記諸課題より見出し得る政策的インプリケーションは次のとおりである。第一は、个旧市都

市圏域の経済・文化・社会・生態を考慮した観光業を含む産業ポジショニング戦略の再考である。先行研究では中共个旧市委員会・个旧市人民政府(2013)および王(2011)でこうした考察がなされているが政府サイドの視点であり、ジェイコブズの言う、人々の生産ニーズを踏まえた輸入(移入)置換型産業の定着をより重要視することがなければ資源供給基地としての性格からの脱却は困難である。鉱物資源産業への比重をいかに軽減するかを盛り込んだ戦略構築が基本的に重要である。第二は、人的資源の育成・確保に関わる政策展開の重要性である。鉱物資源産業が衰退した場合、往々にして労働者は他業種への受け皿が困難であるばかりか社会不安の温床にもなりうる。个旧市の場合も多くの失業者が発生したばかりか、犯罪やエイズ^{注4)}に関する問題も存在することから、産業転換を図るためには人々の意識および能力の転換にもあわせて取り組む必要があり、人材育成・確保政策や雇用政策ばかりでなく、教育・文化・環境に関する政策に改善・工夫が求められる。とりわけ観光業への転換のためにはこれに関する特定の政策を推進する必要がある。また、大局的に重要なことはこれらの諸政策を個々に実行するだけではなく、経済と文化との連携、および都市と後背地との連携によって当該都市圏域をクリエイティブな都市圏域へと創造していくという目標を掲げることであり、その下で先の諸課題を克服していくことが真に重要な政策的インプリケーションと言えるであろう。

5. 結語と展望

本稿では、鉱物資源枯渇型都市の観光資源型都市への産業転換に関する諸課題および政策的インプリケーションをジェイコブズの理論的エッセンスをコアとして構築した理論的フレームワークを用いて考察した。構築した理論的フレームワークの妥当性・普遍性については今後、北海道への適用を含めてさらなる検証を通じて確認していくと共に、必要に応じて改良を図っていきたいと考えている。一般理論化が目標的課題である。

注

注1：これらのほかに1961年施行の産炭地域臨時措置法6条地域として、猿払村、豊富町、幌延町、厚岸町、釧路町、阿寒町、白糠町、音別町、釧路市、奈井江町、沼田町、月形町、美唄市、岩見沢市、栗沢町、栗山町、穂別町が指定されていた。

注2：かつて隆盛した石炭資源型都市であった夕張市は大規模な観光資源型都市への脱却を試みたが失敗した結果、人口減少など都市の衰退化を招き、準財政再建団体となって財政再建を実行中である。

注3) 李・胡(2013, 91頁)では、「个旧市の現有鉱山は17、そのうち大中型鉱山は9であるが、2003年以来、7つの大中型鉱山が閉鎖している。あわせて錫鉱の品質が低下してきており、当初は0.884%であったが、今では0.25%以下になっている。2007年末には个旧市の非鉄金属の保有埋蔵量は50万トンとなり、総計調査埋蔵量のわずか5%、その内の錫保有埋蔵量はすでに調査埋蔵量より10%のマイナスとなっている」と記されている。

注4) 范承剛「“法外之地”“資源枯渇魔呪”下的个旧工人村」『南方周末』2013年4月18日記事においては、麻薬、エイズ、失業・貧困、暴力、銃器売買が蔓延している状況が示されている。中共个旧市委員会・个旧市人民政府(2013)においてもこれらの対策に力を入れることが示されている。また、个旧市では未成年者の犯罪も大きな社会問題化している(湯・黄・張 2012)。

【引用文献】

(日本語文献)

伊藤昭男、「観光資源型都市への転換モデルに関する研究」『北海道地域観光学会誌』第1巻第1号、4-17頁、2014年。

ジェイコブス、ジェイン(中村達也・訳)『発展する地域 衰退する地域』、筑摩書房、2012年(Cities and the Wealth of Nations: Principles of Economic Life, Random House, 1984)。

吉見俊哉「都市の死 文化の場所」『都市とは何か』(岩波講座 都市の再生を考える 第4巻)、第4章所収(101-128頁)、2008年。

(中国語文献)

陳宓龍・宋換斌「鋳業城市發展旅遊支柱産業的可行性分析—以个旧市為例」『昆明理工大学学报(社会科学版)』、第11巻第6期、67-70頁、2011年。

陳宓龍・宋換斌・王曉紅・洪亮・范淑萍「鋳業都市 个旧産業結構現状及發展对策研究」『中国鋳業』、第20巻第6期、2011年。

雛蔚然・何雄「資源枯渇型城市的旅遊業轉型模式研究」、『鄱阳湖学刊』2012年5期、2012年、710-76頁。

范承剛「“法外之地” “資源枯渇魔呪” 下的个旧工人村」『南方周末』2013年4月18日記事。

何艷春「个旧市資源型城市經濟轉型研究」『職大学報』、2011年第4期、60-62頁。

李繼雲「雲南省个旧市經濟轉型的SWOT分析」『經濟研究導刊』、86-87頁、2013年第25期。

李天雪・胡珊珊「个旧市民族旅遊資源開發路徑探析—兼論民族地区鋳産資源枯渇型城市轉型」『紅河学院学报』、第11巻第3期、91-94頁、2013年。

馬繼剛「个旧旅遊資源調查研究」、『昆明大学学报』、第18巻第2号、60-64頁、2007年。

湯雲涛・黄勇・張潔「未成年人犯罪問題調查及檢察維權探析—以雲南省个旧市為例」『雲南警官学院学报』、63-69頁、2012年第6期。

王忠「个旧市科学發展譜新編—以産業發展“二次創業”推動資源型城市轉型崛起」『紅河探索』2011年第5期、18-21頁。

張家友・胡劍波、「資源枯渇城市向低炭經濟轉型之路—旅遊資源開發—以个旧市為例」『安徽農業科学』、第39巻第9期、5459-5462頁、2011年。

中共个旧市委員会・个旧市人民政府「个旧市資源型城市轉型發展狀況総術」2013年4月。

(2014年12月9日受理)